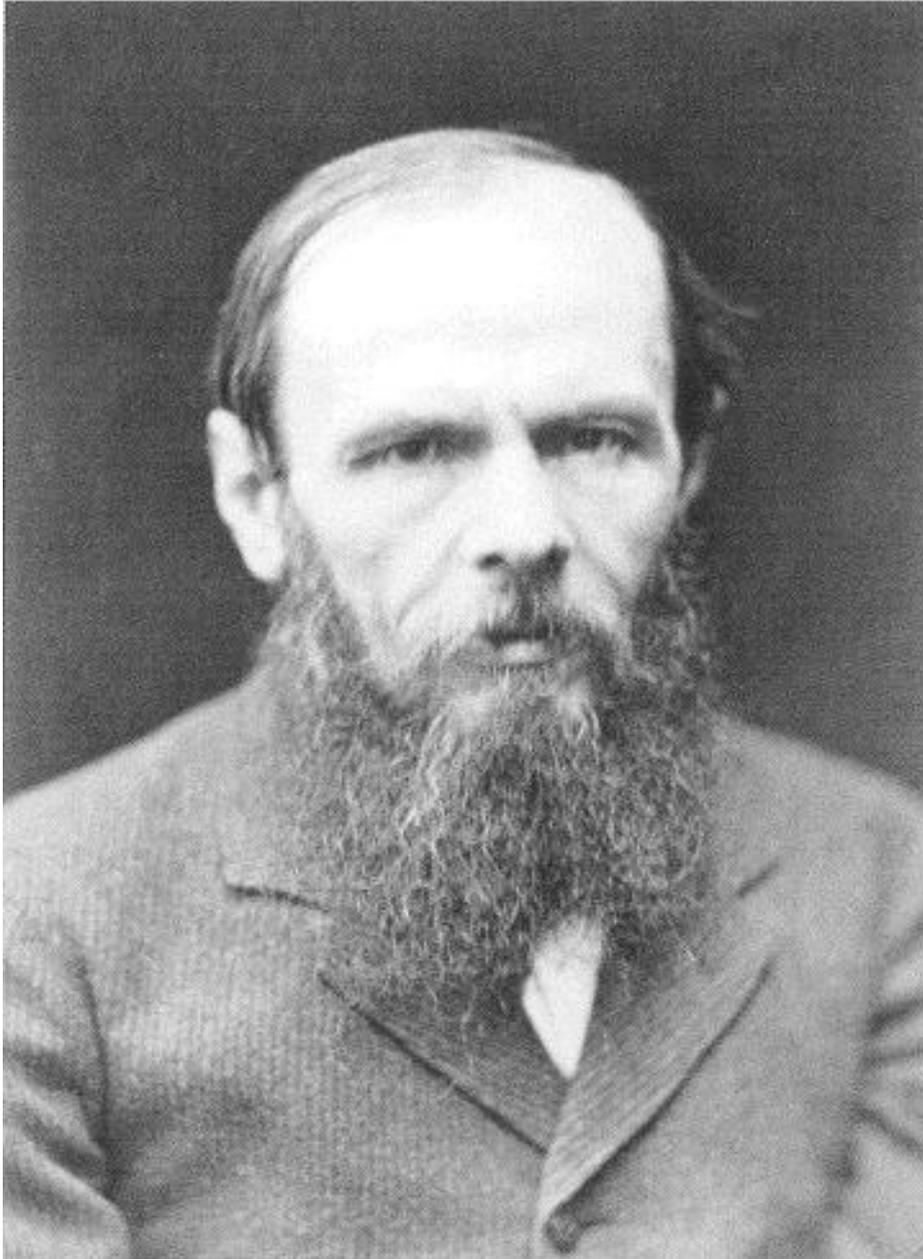


ドストエフスキイの肖像画・肖像写真・9

『カラマーゾフの兄弟』執筆中のドストエフスキイ（2）

М・М・パノーフ撮影、1880年6月9日



Федор Михайлович Достоевский

Фотография М. М. Панова. 1880

[1] .はじめに

★今回扱うドストエフスキイの肖像写真は、1880年6月9日、モスクワの写真家 M・M・パノーフによって撮影されたものです。パノーフによる肖像写真は、次ページに掲載する2枚が残されていて、ドストエフスキイ生前最後の肖像写真とされています。今回はそれら2枚の中で左側のもの、胸から上の肖像写真を取り上げたいと思います。こちらの方が右側のもう一枚、上半身の全体像と較べて、ドストエフスキイの相貌がより大きく鮮明に写し出されているからです。

「鮮明な相貌」と記しましたが、ここには実に多くのもの複雑なものが蔵されていて、例によって、この「ドストエフスキイ的混沌」を読み解き、それを明晰な言葉で表現するということは容易ではありません。今回はこの写真について妻のアンナの回想が残されているので、これも大いに参考とさせて貰おうと思いますが、彼女の解説は実に刺激的で啓発的である一方、我々はここから却って難しい課題も与えられてしまうでしょう。しかし彼の肖像写真に関しては、そもそもこのような読み解き難きこそ、思わぬ豊饒さが顕われ出る場であると思ひ定め、今回も「読み外し」を恐れず、同じテーマについて「行きつ・戻りつ」を繰り返しながら、「ドストエフスキイ的混沌」へのアプローチを計りたいと思います。

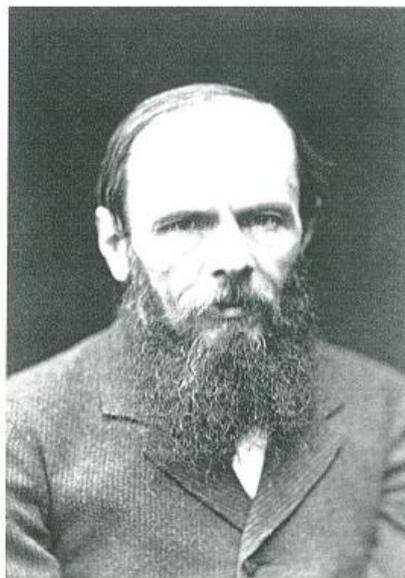
まずこの写真に対する私の印象を記しておきます。

私は長い間、この肖像写真がドストエフスキイという人間の内面を最も鋭利に深く映し出すものと感じ、殊にここ二十年は、ライフ・ワークたる『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』と取り組みつつ、その拡大写真を部屋に貼って日々対峙してきました。これは前回8回目に扱ったシャピロ撮影の写真四枚の中で、②と④で紹介したものの、つまりやや右斜め前方を向く二枚の写真の延長線上にあるものと考えられます。右斜め前方を向く彼の写真とは、概して厳しい沈思の表情を表わすのですが、今回の場合その厳しさは、真剣さと深刻さの方向で今までになく煮詰められ、時に懼ろしさや残酷ささえ感じさせられることもあります。しかし稀にですが、私の目が彼の眼窩の奥に鋭く光る両眼と焦点が合う時もあり、そのような時私は、そこにある精神の透徹と奥深さに胸を刺し貫かれ、その奥から押し寄せてくる精神の充溢、聖なる崇高さの感覚に領されることもあるのです。

私が『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』の二作と格闘しながら、この肖像写真と向き合ってきた二十年間、ドストエフスキイは私の部屋の真中で、上に記したような、相反する複雑な表情を以って私をじっと見つめ、謎を投げかける「スフィンクス」のような存在であり続けました。そしてこの測り難い相貌に右往左往させられた二十年間とは、彼の精神の極め尽くせぬ複雑さと奥深さを痛感させられる年月であると共に、私自身の精神の未熟さと鈍さ、認識の不徹底を痛感させられる年月に他なりません。

した。この事情は今も変わりません。しかし既に『カラマーゾフの兄弟論』を上梓し、その「後産」にあたる考察も書き終え、更には一年余続けた「ドストエフスキイの肖像画と肖像写真」との取り組みも取り敢えずの終わりに近づいた今、私はこの肖像写真についても「判断停止」の状態を抜け出て、最終的な結論からはなお遠いまでも、現時点で自分の内から引き出し得るギリギリの言葉を記しておかねばと思うのです。

皆さんもまず暫くはこのドストエフスキイ最後の肖像写真と向き合い、自分自身の感想を何らかの形で言葉にするよう試みて頂きたいと思います。「ドストエフスキイ的混沌」との取り組みに必要なことは、まずは自らの絶対的主観に徹すること、そしてそれを客観的認識の透徹にまで高める努力を続けること——これが今まで我々の取ってきた唯一の方法でした。



Ф. М. Достоевский, 9 июня 1880, фотографов М. М. Панов, № 1, 46/7



ドストエフスキイ最後の肖像写真
1880.6.9. M.M.パノーフ撮影

[2]. ドストエフスキイの生活史の中で

我々の肖像写真との取り組みの方法ですが、上に記した主観的な印象・感想を一方に置き、前回と同じように、二つの角度からアプローチを計りたいと思います。つまりこの肖像写真を、まずは広い意味で彼の「生活史」の中に置いて見ること、次に彼がこの時取り組んでいた『カラマーゾフの兄弟』の進捗状況との関係で見てみることに、これら二つです。

前回取り上げたのは、1879年3月29日、ペテルブルクにおいて写真家シャピロによって撮影された肖像写真でした。その際我々がまず注目したのは、シャピロがこの写真を『ロシア文学者・学者・芸術家肖像写真集』に掲載すべく撮影をしたという事実でした。シャピロはロシアにおける当代随一の作家たち、ゴンチャロフやツルゲーネフ、ネクラソフやサルトゥイコフ＝シチュドリ等と肩を並べる作家としてドストエフスキイを選び、自らその肖像写真を撮影したのです。ロシア国内ばかりでなく、当時ドストエフスキイはヨーロッパにおいても不動の名声を獲得しつつあったことは、前回記した通りです。その一方でこの作家は重篤な肺の病を抱え、その症状が進行する中、『カラマーゾフの兄弟』と取り組んでいたことも確認しました。

このような生活史上の事実を踏まえ、我々は前回シャピロが撮影した肖像写真の内に、ドストエフスキイの深く透徹した精神性に加え、自らの社会的地位と使命とを自覚した作家の落ち着いた自信のようなものも認めたのでした。つまりそこにあったのは、まずは彼の「求道者」としての真摯さと静謐さを湛えた相貌であり、またロシアを代表する作家に相応しい堂々たる理知的な相貌と言うべきものでした。(シャピロ撮影の他の三枚についての考察も、今回の考察の前提となりますが、これは皆さん各自が前回に戻って確認して下さい)。

一方『カラマーゾフの兄弟』の執筆状況ですが、この写真が撮られた1879年3月末とは、ドストエフスキイがいよいよ作品の大きなヤマ場、「大審問官」に取り掛かろうという時でした。つまり「実行的な愛」の人アリョーシャと、悪魔の「否定の精神」に魂を委ねたイワンとが、「実行的な愛」の源泉たる「キリストの愛」を巡り、「大審問官」の叙事詩を挟んで正面から対決をするのです。「肯定と否定」「光と闇」の両極を対立軸として展開してゆく『カラマーゾフの兄弟』、その頂点となる「キリストの愛」を巡る兄弟の対決、そしてそこにある弁証法的な力学を、我々は1879年シャピロが撮影した4枚の写真の内にも見て取れることを確認しました。

容易には言葉に捉え難い彼の肖像写真に対し、その背後にある生活史と、カラマーゾフ世界の執筆状況とを考慮しつつアプローチし、その相貌に秘められたものを言葉とするよう試みることに——今回もこの方法を以って、1880年ドストエフスキイ最後の肖像写真に向き合いたいと思います。

1879年3月から1880年6月まで

1879年3月29日と1880年6月9日。シャピロとパノーフによる写真撮影を挟

んだドストエフスキイの生活とは、基本的には専ら『カラマーゾフの兄弟』の執筆を中心とするものでした。この間の作品の執筆状況については次の [3] で見ることにして [今回] は [2] と [3] の間で「行きつ・戻りつ」を繰り返します、我々はまず、これら一年二カ月余の彼の生活史を概観しておきたいと思います。カラマーゾフとひたすら取り組む間も、彼の生活は様々な出来事によって刻まれていたのです。

この後すぐに見る「プーシキン講演」との関連で注目しておくべきは、ドストエフスキイが繰り返した自作を中心とする作品の朗読でしょう。その名声ゆえに、また彼独特の朗読の味ゆえに、この作家には様々な集まりでの作品朗読の依頼が続いていました。それら朗読会のいずれにおいても、妻のアンナの回想（後述）によれば、彼の語り口は流暢なものとはほど遠く、むしろ淡々とした朴訥なものだったようです。しかしその朴訥な語り口自体が、朗読されるべく選ばれた作品の内容と相俟って、いつの間にか聴衆の心に沁み入り、その心を強く揺り動かし、朗読会はいつも見事な成功で終わったのです。

これと並行して、アンナによる彼の作品の出版と販売の努力が続き、1880年1月1日には、地方講読者への通信販売を中心とした「ドストエフスキイ書店」が開店します。彼の「プーシキン講演」もまた、夫婦の手により『作家の日記』の特別号として活字化され、世に送り出されるでしょう。常に逼迫していたドストエフスキイ家の財政状態は、妻の献身的な働きのお陰で次第しだいに改善されていったのです。

彼の社会的名声の高まりを反映する事実としては、当時ロシア帝国の政治・宗教上の実権を握る一人であったポベドノースツェフや、皇帝アレクサンドル二世の子息たち（セルゲイ、パーヴェル両大公）など、上流支配階級の人々との交流が進んだことも注目すべきでしょう。それと相呼応するかのよう、当時は様々な反政府テロ事件が頻発し、1881年1月28日の彼自身の死から一か月後、3月1日にはアレクサンドル二世が「人民の意思」党によって暗殺されてしまいます。皇帝暗殺にまで突き進む過激派による反政府テロ活動を眼前にして、祖国ロシアの運命の問題はドストエフスキイの心の中で嵐のように吹き荒れていたと考えるべきでしょう。この問題は、青年時代の革命運動への連座による逮捕と、死刑判決の末の十年にわたるシベリア流刑との関係で、また彼の西欧旅行記『夏象冬記』との関係からも、更には革命組織のニヒリズムと破綻の問題を扱った『悪霊』との関係からも、様々な考察を必要とするものですが、今ここで十分に扱う余裕はありません。しかし我々は祖国ロシアの運命という問題が、広く西欧近代が抱える病の問題と共に、今回の肖像写真に大きな影を落としていることを確認することになるでしょう。

彼の健康状態、具体的には肺の病も悪化の一途を辿ってゆきました。1879年の7月末から約一か月余、彼はドイツのエムスに赴き、ここで1874年以来彼の治療に当たったオルト医師の下、肺気腫の鉱泉治療に専念すると共に、『カラマーゾフの兄弟』の執筆を続けます。しかし病状の目立った改善は見られず、9月の始めに帰国します。妻のアンナによると、この年の暮れ、ドストエフスキイはアンナの従弟である医師スニートキンの診察を受け、この医師から心配はないと安心させられるのですが、アンナ自身は密かにこの

従弟から、肺気腫が夫の命取りになるだろうと告げられます。癲癇発作と共に、肺の病は宿痾しゆくゎとしてドストエフスキイに取りつき、彼を着実に死の世界へと追い込んでゆくのです。

生活史の頂点—— 撮影前日の「プーシキン講演」

このような生活史の中で、その頂点を飾ったと言うべき一つの「事件」について見ておかなければなりません。モスクワで催された一連のプーシキン記念祝典に招かれ、ドストエフスキイが行った講演です。今回の肖像写真はこの講演の翌日に撮影されたものであり、後で見るように妻のアンナは、この写真には「夫にとって意義深かった前の晩の出来事が生き活きと刻印されている」と記しています。「プーシキン講演」がドストエフスキイにとって如何なる点で「意義深かった」のか？ —— 今回の肖像写真の読み解きのためにも、我々はこの問題を明らかにする必要があるでしょう。ここに、今記した祖国ロシアの運命の問題が深く関わってくるのです。

1880年6月8日、プーシキンの銅像序幕式の翌々日のことです。様々な記念式典が行われる中、ロシア文学者愛好家協会主催の公開講演会に、ドストエフスキイは講演者の一人として登場します。ここで彼が行った「プーシキン講演」は、前日に行われた「仇敵」ツルゲーネフの講演を遥かに凌ぐ大成功を収め、ツルゲーネフ自身も含めた聴衆を熱狂させ、その感動と熱気の嵐は、それへの反動や反発をも含んで、この年ロシア文学界・文壇に吹き荒れることになるでしょう。

プーシキン記念祝典に招待されたドストエフスキイは、予め講演に対する草稿も用意し、万全の態勢で臨んだのでした（このことは『カラマーゾフの兄弟』の進捗状況との関係で、次の[3]で詳しく見ます）。講演の内容は直後の6月13日、『モスクワ報知』に掲載されます。しかし約二か月後の8月12日には彼自身が、自らの発行する『作家の日記』で、この講演についての特別号を組んだのでした。この特別号は三段階の構成になっていて、彼はまず冒頭で講演に対する彼自身の要約的説明を記し（1）、次に講演自体を掲載し（2）、最後には様々な批判・反論の中でも、殊にモスクワ大学教授A・グラドーフスキイの批判を採り上げ、それに対する彼自身の激しい反論を付します（3）。この万全とも執拗とも言うべき構成から明らかなように、ドストエフスキイにとりこの講演は、直接は何よりもプーシキンの業績の称揚であり、この大作家・大詩人がロシアの文学史と精神史において持つ偉大な役割の確認と称讃の作業だったのですが、同時にこれは相当の覚悟と使命感を以ってなされた、世に対する彼自身の思想のマニフェストであったと見るべきでしょう。つまりこれから見るように、この講演は西欧近代とロシアの歴史を向こうに置き、プーシキン文学と重ねてドストエフスキイが試みた、ロシア精神と自らの精神の根と使命の確認・宣言という畢生の大事業、「白鳥の歌」でもあったと考えられるのです。

この「プーシキン講演」を巡る一連の出来事が、『カラマーゾフの兄弟』創作の最後のヤマ場とどう重なるかについては、次の[3]で検討することにして、ここでは『作家の日記』に掲載された「プーシキン講演」（2）とグラドーフスキイへの反論（3）から、主要

部分を確認しておきましょう。少々引用が多くなりますが、これらには彼自身の生涯の思索と創作の総決算とも言うべき仕事が、つまり祖国ロシアと自らの精神の根であるキリスト教に関する重大な考察が、極めて端的直截に記されています。これらは妻のアンナが記す「夫にとって意義深かった前の晩の出来事」の、その「意義」について理解するための大きな手掛かりとなるのみでなく、『カラマーゾフの兄弟』を理解する上で、ひいては演説の翌日撮影された肖像写真を読み解く上で、無視してはならない基本的な資料だと考えられます。

「プーシキン講演」

ドストエフスキイの「プーシキン講演」を貫くのは、『オネーギン』に登場するタチヤーナという女性への絶対の讚美です。ペテルブルクからやって来たオネーギンが、ロシア近代を象徴するインテリゲンチヤ、根無し草の「旦那」であるのに対して、彼を愛する田舎娘タチヤーナとは、ロシアの大地深くに根を張って生きるロシア民衆の代表です。

このようにドストエフスキイの「プーシキン講演」は、まずは『オネーギン』というロシア文学の傑作の分析による、オネーギンとタチヤーナとの対立図式の提示を土台として、ピョートル大帝以来の西欧化によってインテリ・支配層が忘れ去ろうとしているロシア、大地に根を置くロシア民衆の魂を強く浮かび上がらせようとするものです。とりわけ注意すべきは、ドストエフスキイがここから更に進んで、大地に根ざしたタチヤーナの生と運命が指し示すものの内実を、具体的にキリスト教的磁場において提示することでしょう。即ちタチヤーナが指し示すものとは、イエス・キリストが体現する「神」と「真実」と「美」であり、これらを内に宿す「ロシア的魂」に他ならないとされるのです。彼によればロシア民衆とは、ロシアに留まらず全ヨーロッパ・全世界に感応し共鳴する精神能力を備えるばかりか、全世界をキリスト教的兄弟愛の下に和解させ統合する力を持つ人々なのです。

重ねて注意しておきたいと思います。ドストエフスキイはオネーギンとタチヤーナとの対立図式を、ただ単に西欧と祖国ロシアとの対立とか、大地からもぎ離された人間と大地に深く根差す人間の対立というような、定型的な対立図式に落とし込んで話を終えることはしません。彼はロシア民衆が保持する「キリスト」に専ら光を当て、この「キリストの福音による律法」を以って全人類を究極的に和解させ統合するのだという世界史的・救済史的展望にまで視野を拡げ、そこから長い間虐げられ苦しめられてきたロシア人、粗野で愚昧とさえ言われるロシア民衆に焦点を絞り、彼らこそこの究極のキリスト教的・メシア的^{フシエチェラヴィエク}使命を担う人々であり、「全人」なのだという逆説の提示にまで行き着くのです。

このことを、彼自身の言葉で確認しておきましょう。

「そうです。ロシア人の使命は、争う余地なく、全ヨーロッパ的であり全世界的なのです。真のロシア人になるということ、完全なロシア人になるということ、それは恐らく、(最終的に、この点を銘記して頂きたいのですが)、全ての人間

の同胞となるということ、もしこの言葉をお望みならば、全人となるということに他なりません」

「[真のロシア人になるということは] ヨーロッパの矛盾に対して、いよいよ最終的な和解がもたらされるように努めることです。また自分たちのロシア的魂の中に、(それは全人的で、一切を結合させる魂なのですが)、ヨーロッパ的憂愁への出口が存在することを示し、また兄弟愛を以って我々の兄弟全てをその[ロシア的魂の]内に収めることなのです。そして究極的には、恐らくキリストの福音による律法によって、全民族を同胞として完全に結合させ、偉大で全般的な調和という最終的な言葉を発するよう努めることでしょう！」

次々と繰り出される極めて抽象的・観念的・理想主義的な宗教的概念。そしてそれらの電荷の高さと熱さ。殊にロシアが帯びる全世界的使命の高らかな宣揚。他方でドストエフスキ独自の淡々とした朴訥な語り口——作品朗読の時と同様に、これらアンバランスさが生み出す独特の雰囲気は聴衆の「ロシア的魂」に訴え、彼らを興奮と熱狂の渦に巻き込んでいったのでしょ

ロシアの近代化の歴史に対する危機意識

聴衆が巻き込まれた熱狂の渦について考える際に、我々は「ヨーロッパの矛盾」や「ヨーロッパ的憂愁」等の抽象的で詩的とも言うべき言葉の背後に、時代と世界に対するドストエフスキの強い危機意識が潜んでいることを見逃してはならないでしょう。ピョートル大帝以来、西欧世界に倣い近代化を押し進めてきた祖国ロシアが、この西欧化によって如何に深い「病」をも宿すことになってしまったか、ロシア国民、殊にインテリ・支配層がキリストから如何に遠く離れてしまったか——これらについての危機意識、『夏象冬記』の旅以来ドストエフスキを捕え続けた、西欧近代と祖国ロシアに対する終末論的とも言うべき痛切な危機意識です。「預言者」の説教を思わせるような講演の抽象性と宗教性は、この危機意識に裏打ちされていたからこそ、ツルゲーネフを始めとするインテリ聴衆の心を打ち、一時でも彼らに我を忘れさせ、演壇に殺到させたのでしょ

う。先に記したように、この講演は大詩人プーシキンへの心からの讚辞オマージュであると共に、人間と世界と歴史に関するドストエフスキ自身の思索と創作の総決算であり、これを我々は彼の「白鳥の歌」であるとも、或いは世に対する「告別説教」(ヨハネ伝十三-十七)であるとも考えて初めて、その意義は適正に位置づけられるのだと思います。

また我々は、この熱狂の渦に巻き込まれた人々の心に生まれた反動のことも忘れてはならないでしょう。事実、彼の講演が出发点とし核とした対立図式、ロシアの近代化に対する痛烈な批判と、逆にロシア民衆が宿す「世界との精神的共鳴性」の称揚、殊に彼らがキリストに支えられて担う世界救済の役割についての熱い預言者的言表は、間もな

く文壇の様々なサークルや雑誌において、厳しい批判や嘲笑を引き起こすことになるのです。講演中にすすり泣きをし、演壇に駆けつけてドストエフスキを掻き抱くまでしたツルゲーネフも、一週間後にはこの演説への痛烈な批判を始めるのです。風の「吹き返し」です。しかし逆に、このような流れそのものが、ドストエフスキの講演が如何に「的」を衝いたものであったか、またアンナの言うように如何に「意義」を持つものであったかを証明するとも言えるでしょう。

グラドーフスキイの批判と、それに対する反論

『作家の日記』において、「プーシキン講演」の紹介の後に付されているのは、先に記したように、グラドーフスキイの批判に対する彼自身の痛烈な反論です。「とんでもない言いがかり」という表現で始まるこの反論は、「プーシキン講演」が如何なる種類の批判に曝されたか、そして彼が如何なる「敵」と戦っていたかを、この上なく雄弁に物語るものです。我々の目的はロシア文壇における論争史の詳細を辿ることはありませんが、グラドーフスキイへの反論は、西欧とロシアとが近代化によって陥った病と、逆にロシア民衆がその魂の内になお保持する「キリスト教の本質」についての、ドストエフスキイの思想・信念をこの上なく鮮やかに表現するものです。我々はこれを『カラマーゾフの兄弟』創作との関わりで、また講演の翌日に撮られたドストエフスキイの肖像写真を読み解く手掛かりとしても、ここに取り上げておきたいと思います。先のアンナの表現を再び用いるならば、彼の講演が真に「意義」を持ち、また我々が絞るべき「的」があるとすれば、それは正にここだと考えられるのです。

「キリスト教的 啓蒙」^{ブラスヴェシチェーニエ}

グラドーフスキイに対する反論は、ロシア民衆が保持する「キリスト教の本質」「キリストの真理」「キリスト教的 啓蒙」^{ブラスヴェシチェーニエ}等の概念を巡って展開してゆきます。そしてこれらは皆『カラマーゾフの兄弟』の中心思想に連なるものばかりです。次の[3]への準備も兼ねて、ここでは「キリスト教的 啓蒙」^{ブラスヴェシチェーニエ}に焦点を絞って見ておきましょう。「プーシキン講演」に続き、この一語からドストエフスキイのキリスト教思想の核心が、つまりキリストへの熱烈な信と愛が、またその裏返しで、彼の西欧近代への批判と、西欧に倣った祖国ロシアについての危機意識が鮮やかに浮かび上がってくるでしょう。

まず「просвещение」^{ブラスヴェシチェーニエ}（啓蒙・教化）という語の確認をしておきましょう。この名詞の基にある動詞は、「просвещить」^{ブラスヴェシチ}（完了体）「просвещать」^{ブラスヴェシチャーチ}（不完了体）」という動詞で、「教化する、啓蒙する、啓発する」「理解させる、目を啓かせる」等の意味を持ちます（岩波ロシア語辞典、1992）。この動詞の語根は^{スヴィエト}「свет」で、「日の光」から「真理の光」「知性の光」等々、様々な意味での「光」を表わします。英語の enlighten（en-light-en）に相当する語で、人間の心の闇に光・light を差し込ませるところから、「教化する」「啓蒙する」という意味となり、その「光」がそもそも何処に由来するの

ということが大問題なのですが、近代から現代にかけて、enlightenment と言うと「知性の光」を基盤として、専ら「啓蒙」「啓蒙主義」を意味し、西欧近代文明の土台となった合理的・実証的・功利主義的思想が指されることとなります。

グラドーフスキイも以上のような文脈で、自らが奉じる「ヨーロッパ的^{ブラスヴェシチェーニエ} 啓蒙」
という語を頻繁に用い、辛辣なドストエフスキイ批判を展開したのです。

「いずれにせよ、ロシア人は既にこの二世紀間、ドストエフスキイ氏によって我が国民的特性と認められた、ロシア的「全世界的共鳴性」のお陰で、この上なく強く我々に働きかける、ヨーロッパ的^{ブラスヴェシチェーニエ} 啓蒙の影響下にあつたのである。この「ヨーロッパ的^{ブラスヴェシチェーニエ} 啓蒙を離れて、我々「ロシア人」は何処にも行くことはないし、行くことも出来ない。これは事実であり、この事実に対して我々には何も出来ない。それというのも以下のような単純な理由に拠るのだ。つまり啓蒙化^{ブラスヴェシチェーニエ}されることを望む全てのロシア人は、「そもそも啓蒙への」ロシア的源泉など全くありはしないのだから、必然的にこの啓蒙^{ブラスヴェシチェーニエ}を西欧的源泉から受け取らざるを得ないということなのだ」

「啓蒙^{ブラスヴェシチェーニエ}」という言葉を通じて、我々はここに十九世紀ロシアを分断した「西欧派」と「スラヴ派」の論争の一典型例を見ることが出来るでしょう。「ヨーロッパ的^{ブラスヴェシチェーニエ} 啓蒙」の立場に立つグラドーフスキイの主張は明快で、またこれに対するドストエフスキイの反論も明快です。これから見るようにドストエフスキイは、「啓蒙^{ブラスヴェシチェーニエ}」という語の意味について、自分はグラドーフスキイ氏とは全く違った方向で理解していると断言します。ドストエフスキイにとって、「啓蒙^{ブラスヴェシチェーニエ}」という言葉の「真の」「基本的な」意味とは、単に西欧的理性による人間の知的教化などではなく、全人的な存在の革新、つまり人間の内に「魂を照らし、心を啓き、知性を方向づけ、人生の道を指し示す、精神的な光」を浸透させることなのです。しかもドストエフスキイが見つめる「啓蒙^{ブラスヴェシチェーニエ}」の光とは、グラドーフスキイが拠って立つ西欧近代の知性の光よりも遙か遠く、新約的磁場に根を持つものであり、他ならぬキリストから発される光だとされるのです。そしてこの光は「キリスト教的啓蒙^{ブラスヴェシチェーニエ}」の光とされ、それは西欧の人々よりも、また西欧に追従してロシアの大地を忘れ、深い病の内にいるインテリ・支配層よりも、本来遥かに強く確かにロシア民衆によって受け止められ、彼らの内に保持されているとされるのです。「啓蒙^{ブラスヴェシチェーニエ}」という言葉の意味をキリストにまで遡って捉え、ここから西欧近代の限界性を撃つこと、しかもそのキリストとは抽象的・観念的に祭り上げられた「記号」などではなく、彼自身の「聖書熟読といふ體驗」(小林秀雄、『白痴論』)を土台として構成された、極めて具体的な活きたイエス・キリスト像であること——私はドストエフスキイの思想の本質と独自性とは、このように聖書的磁場に立ち、そこから超越に眼と心を向けるところにあると考えています。

ドストエフスキイの生涯にわたる「イエス像の構成」については、拙論「ドストエフスキイのイエス像」を参照して下さい。(雑誌『あじやり』33号、親鸞仏教センター、2017)

ロシア民衆のキリスト

ところで「^{ブラスヴェンチューニエ}啓蒙」を巡るこのような視点とは、『カラマーゾフの兄弟』が正にその核として持つ視点に他なりません。つまりゾシマ長老やアリョーシャが拠って立つ基盤たる聖書世界について、またイエスその人と「キリストの愛」について、更にはキリストを抱くロシア民衆について——次の〔3〕で見ると、既に一年余り前からドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』で展開してきた思想が、グラドーフスキイに投げ返された激しい反論の内には、他の何処にも見られぬほど集中的かつ端的直截に語り出されているのです。ここに代表的な部分を抜き書いておきましょう。

『作家の日記』の訳出に当たっては、新潮社版「ドストエフスキイ全集」17-19の川端香男里訳が、「啓蒙」という一語の訳出を取ってみても抜群に的確であり、これを参考にさせて頂きました。

「私は断言する。我々の民衆は、キリストとその教えを自分の存在の核に受け入れているため、既に相当前から啓蒙されていると。人々は私に言うだろう。民衆はキリストの教えなど知らないし、民衆に説教など語り聞かされることはない。だが、これは空疎な反駁である。〔民衆は〕全てを知っているのだ。教理問答から試験を出されれば落第だとしても、およそ知る必要のあることは全て知っているのである。〔民衆は全てを〕教会堂で習い覚えたのだ。ここで祈りや聖歌を何世紀にもわたり聴いてきたのだ。そしてこれらは説教よりも優れたものである。民衆はその敵〔異民族の占領〕から逃れ、まだ森の中にいた頃、これらの祈りを繰り返し、また自ら〔聖歌として〕歌っていたのだ。抜都の侵入時には、恐らく「力なる主よ、我らと共にあらんことを！」と歌っていたのであろう。そして恐らくこのような時、この聖歌を自分のものにしてしまったのであろう。と言うのも、キリストを除けば、当時民衆には何も残っていなかったのであり、しかもこの中に、この聖歌の中に、これ一つの中に、既にキリストの真理の一切があったからである」

「今はただ次のような基本的命題の形で、私の考えを語るに留めておこう——もし我が国の民衆がキリストとその教えを自分の存在の核に取り入れることによって、既に昔から啓蒙化されていたとするならば、言うまでもなく同時に

「ロシア民衆は」彼と共に、つまりキリストと共に、^{ブラスヴェシチエーニエ}真の啓蒙^{ブラスヴェシチエーニエ}をも取り入れていたであろうということである。このような基本的な啓蒙^{ブラスヴェシチエーニエ}の蓄積があるのだから、言うまでもないことだが、^{めぐみ}西欧の科学が真の恩恵に転ずるのは、ロシア民衆にとってのみである。我が国においては、^{めぐみ}西欧におけるように、キリストが科学のために輝きを失うというようなことはないのだ」

「私に、この私が民衆を知らないなどと言わないで欲しい！ 私は民衆を知っている —— 民衆のお陰で、私はキリストを再び私の魂の中に受け入れることが出来たのだ。まだ幼な子だった頃に父母の家で知ったキリスト、そして自分もまた「ヨーロッパ的リベラル」となった時に失いかけたあのキリストを」

「罪悪は悪臭である。そして悪臭は太陽が完全に輝き出せば消えてしまう。罪悪は過ぎ去るものである。しかしキリストは永遠である。民衆は日々罪を犯し、悪行を働く。しかしより良き瞬間、キリストの時には、[民衆は]真理の中にいて決して誤ることはない。真に重要なこととは、民衆が何を自分の真理として信じるか、何の中に真理を見出すか、如何に真理を自らに思い浮かべるか、何を自分のより良き希望と見なすか、何を愛したか、何を神に願うか、何について祈りつつ涙するか —— これらのことである。民衆の理想はキリストである。正にキリストと共に、疑いなく、^{ブラスヴェシチエーニエ}啓蒙はあるのだ。我が民衆は、その最高度の宿命的な瞬間には、その全ての共通な全民衆の問題を、常にキリスト教的に解決してきたし、今も解決しているのである」

「科学と^{ブラスヴェシチエーニエ}啓蒙とは別のものである。民衆とその力に期待して、恐らく何時の日か、この我がキリスト教的^{ブラスヴェシチエーニエ}啓蒙を、十全なかつ完全な輝きにまで高めようではないか」

ロシアの「民衆」と「キリスト」と「真理」。「希望」と「涙」と「愛」。そして「聖歌」と「祈り」と「神」。更には「ヨーロッパ的啓蒙」に対する「ロシア的」「キリスト教的啓蒙」 —— ここにあるのはドストエフスキイの宗教思想の正に^{キー・ワード}核心であり、「神」に向かうに当たっての、彼の「キリスト中心主義」とも呼ぶべき姿勢の端的かつ平明な、しかも熱い表明です。『カラマーゾフの兄弟』に触れた人ならば誰でも、これらは全て聖者ゾシマが語った言葉だと告げられても、何ら不思議に思わないに違いありません。

再び肖像写真と向き合って ——相反する二つの相貌——

「プーシキン講演」から始まって、『作家の日記』におけるグラドーフスキイへの反論に至るまで、ロシア民衆と彼らが守るキリストに対するドストエフスキイの信と愛、「キリス

ト中心主義」とも呼ぶべき超越観・宗教観を確認してきました。このキリストへの信と愛が強いものであればあるほど、ひたすら西欧に倣い近代化を推し進め、キリストを遠ざけてきた祖国ロシアに対して、ドストエフスキイが抱く危機意識が強まるのは当然でしょう。我々は彼の最後の肖像写真が持つ厳しさが、この危機意識から生じる厳しさであり、またそこから発される世への預言者的警告・弾劾の厳しさであると考えたいと思います。

しかし我々はこの肖像写真の内に、ロシアの歴史に対する危機意識の厳しさとは別の、もう一つの相貌が現れ出ている可能性も忘れてはならないでしょう。つまりその危機意識が掘って立つキリストへの強い信と愛そのもの、これを映し出す相貌の可能性です。このことを考える手掛かりとなり導きとなるのが、ドストエフスキイの妻アンナの『回想』です。アンナはその『回想』の中で、夫ドストエフスキイの肖像写真に現れ出た表情を「心からの喜びと幸福」という言葉で言い表すのですが、彼女はモスクワから帰った夫の表情を、彼が尊敬する偉大な国民詩人プーシキンへの讃辞を通して、ロシア民衆の内に生きて働くキリストを語り得たこと、そして聴衆から熱狂的に迎えられたことの「喜び」であり「幸福」であると捉えたものと思われまふ。アンナが記すこの「心からの喜びと幸福」について、しばらく考えてみましょう。

妻アンナの回想 —「心からの喜びと幸福」—

「プーシキン講演」から数日後、モスクワから夏の別荘地スターラヤ・ルッサに戻った夫について回想する彼女の筆は、夫の死（1881）から既に三十年が経って書かれたものであるにも拘らず（『回想』の執筆は1911年から1916年にかけて。出版は1925年）、極めて鮮明で生気に溢れたものです——夫が「かつて見たことのないほどに満足そうな、生き生きとした」様子でモスクワから戻ってきたこと。身体は疲れ切っていたにも拘らず、その独特の記憶力を以って講演会のことを語り聞かせてくれたこと。つまり夫が、プーシキンという偉大な国民的詩人に讃辞を述べることの出来た喜びについて、そしてまた自分の演説と才能に対して聴衆が示してくれた熱狂的な反応について、詳細に語り聞かせてくれたこと。その時の夫は「ミヌーティ・ヴェリチャーイシエバ・シヤースチ至福の時」にあり、モスクワで味わった「忘れられぬ瞬間」を再び味わっているかのように陶然としていたこと等々・・・

続いてアンナが記すのは、我々が今回検討しつつあるパノーフの肖像写真についてです。その一節をそのまま訳出しておきましょう。

「夫が語るところによると、その〔プーシキン講演の〕翌朝、彼の許を当時モスクワで最も優れた写真家で芸術家であったパノーフが訪れ、自分にあなたの写真を撮影するチャンスを与えては頂けないだろうか頼んできたというのです。夫はすぐにもモスクワを発たねばならなかったため、時を逸さず、パノーフと共に彼の写真館に赴いたのでした。この芸術家によって撮られた写真には、夫にとって意義

深かった前の晩の出来事が生き活きと刻印されています。私はこの芸術家パノーフの写真が、沢山ある夫の写真、しかも多種多様な表情をした肖像写真の中で（夫の気分は変わりやすいのです）、一番よく撮れたものだと思っています。この写真に私が認めるのは、夫が心からの喜びと幸福とを味わっている時、その顔に私が何度となく見出した、正にあの表情なのです」

（『回想』 アンナ・ドストエフスカヤ、1925）

上記のようにこの『回想』は1925年、L.グロスマンの編集により出版され、1971年にはS.ペローフとV.トゥニマーノフの編集により新たに出版されます。しかし両者共に抄録で、B.チホミーロフ氏らの編集による完全版の出版はつい先年、2015年のことです。

繰り返しとなりますが、プーシキンの偉大さの本質が、キリストを宿すロシア民衆を描き得たことにあるのだと語り得た夫ドストエフスキイの高揚と陶酔。それを講演の翌日写真家パノーフは生き活きと映し撮ったのであること。そして夫がなおこの高揚と陶酔の内にモスクワから帰ったのであること——これらのことを的確に理解し、また記憶もしていたからこそアンナは、三十年余りの年月が経った後でも、パノーフの肖像写真を前にして、なおこの時の夫を「至福の時」「この上ない喜びと幸せ」という言葉を用いて表現し得たのでしょう。「速記者」であるアンナは、『賭博者』と『罪と罰』から始まって、『カラマーゾフの兄弟』に至る夫の作品のほぼ全てを「口述筆記の形で」書き留め、それらを直ちに清書して校正用原稿として夫に渡し、更にはそれらの作品の出版にも力を注いだばかりか、夫の死後はその作品と思想の宣布のために命を捧げたのです。我々は彼女が、ドストエフスキイの思想生成の詳細を間近で知り得た唯一の存在であり、恐らくはその思想の本質を誰よりも深く理解していた人物の一人であったことを忘れてはならないでしょう。彼女は夫の「プーシキン講演」の「意義」も正確に理解していたのです。

アンナから与えられた課題

私がアンナの『回想』を正面から読んだのは今から十年ほど前、『カラマーゾフの兄弟論』の執筆が後半に差し掛かった頃のことでした（様々な研究書や文献を漁り、他人の頭で考えるよりも、まずは作品自体の徹底的分析を自らに課していたため、この『回想』も後回しにしていたのです）。私がここに見出したのは、「心からの喜びと幸福」という思いもかけなかった言葉でした。長い間この肖像写真が持つ「謎」の深さに、しかもその厳しさに圧倒されてきた私には、ここにあるものが「喜び」であり「幸福」であるとする妻アンナの解説は驚きであり、新たな「啓示」のように迫るものがありました。冒頭近くで記したように、この肖像写真との長い取り組みの間には、ごく稀にですが、私には突然ここから聖なる崇高さが押し寄せてくることもありました。アンナの解説は私に、この感覚が決して錯覚ではなく、彼女が

記す「喜びと幸福」と無関係ではないこと、この角度から肖像写真と向き合うことの必要を告げているように思われたのでした。

しかしその後私は、この肖像写真を眺めるごとに、ドストエフスキイのキリストへの熱烈な信と愛については理解出来るとしても、ここに現れたもの全てを「喜び」と「幸福」という言葉の内に収め切ることは困難だと感じざるを得ませんでした。私の目がまず捉えるのは、やはりドストエフスキイの相貌が持つ鋭い厳しさであり、その背後に自然に思い浮かび、私が感情移入を出来るのは、彼が祖国ロシアと西欧近代の歴史に対して持つ強い危機意識であり、彼を捕えて離さない苦悩とか痛みとか怒りなのです。アンナの『回想』から射し込んできた「光」にも拘わらず、なお私を強く支配していたのは「闇」の感覚・印象だったと言わざるを得ません。生来の悲観的で懐疑的な性格や、認識力の未熟さや鈍さ故なのでしょう。私はアンナの言葉が自分の胸に納まることあり得るのか、「光と闇」の相反する印象が、それぞれの然るべき位置をこの心に占める時が来るのかを疑いつつ、なお部屋に貼った写真と向き合い続けたのでした。

新しい視野

しかし私には、『カラマーゾフの兄弟』との取り組みを続ける内に、ドストエフスキイにおいては「光と闇」が、コインの「表と裏」のように存在しながら、しかしそれらは互いに相容れず存在するのではなく、活きた「奥行き」と「立体感」を持った一つのものとして存在することが次第しだいに実感されるようになってゆきました。つまり「プーシキン講演」に関係した彼の言説の一つ一つが、『カラマーゾフの兄弟』の世界と呼応し合うことが明らかになるにつれて、そもそもドストエフスキイの思想そのものが、そのキリスト論も含めて、本質的に「光と闇」の相反する両面から成り立つものであること、それも「極性の弁証法」とも言うべき「奥行き」と「立体感」を持つ「生命体」であることが自覚されていったのです。ドストエフスキイ最後の肖像写真が与える「光と闇」の相反する印象も正にここに由来するのであり、「あれか・これか」という選択の対象とすべきものではない——こう思うようになっていったのです。

[3]に先立って、ここで一度結論を記しておくとするならば、ドストエフスキイ最後の肖像写真が与える一見相容れぬ印象、「光と闇」の両極的相貌とは、一方ではロシア民衆が宿すキリストに対する彼の熱烈な信と愛をそのまま映し出すものであり、他方ではこれと表裏一体の形で、グラドーフスキイに対する反論が示すように、西欧近代とそれに倣ってロシア社会が呈するに至ったキリスト疎外と非聖化という現実に対する、彼の強い危機感と弾劾の心を表わすものである。そしてこれら二つの印象は決して互いに退け合うものとしてではなく、ドストエフスキイのキリスト観として、両者一体のものとして受け取るべきものである——このように表現し得るでしょうか。

かくしてドストエフスキイ最後の肖像写真との取り組みは、彼の「プーシキン講演」に

行き当り、妻アンナの『回想』との出会いを大きな転換点として、この写真の相貌が与える「光と闇」の相容れぬ印象という問題に突き当たったのでした。以下の〔3〕では、この問題を改めて彼の『カラマーゾフの兄弟』との取り組みの中で考え、今取り敢えずの形で記した結論を、更に確認し直したいと思います。

〔3〕.『カラマーゾフの兄弟』と対応させて

1879年と1880年とは、ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』に、文字通り「命を削って」取り組み続けた二年間だったと言ってよいでしょう（執筆の開始は1878年の夏から秋にかけて、脱稿が1880年の11月8日とされ、執筆期間は延べで三年間となります）。既に見たように、モスクワの写真家パノーフによって肖像写真が撮られた1880年6月9日とは、「プーシキン講演」の翌日のことです。この写真撮影の日が彼の『カラマーゾフの兄弟』執筆の進捗状況の中でどのような位置にあったのか、具体的にこの作品は雑誌『ロシア報知』の何月号に掲載されたのか、またそれらの執筆と原稿送付は何時だったのか等について、まずは前回と同じく、L.グロスマンの報告に拠って確認をしておきましょう。（新潮社版『ドストエフスキイ全集』別巻、松浦健三訳、1980）

- ・ 1月号、第三部第九篇、(1月14日以前に原稿送付)
- ・ 4月号、第四部第十篇、(2月-3月執筆、4月初め原稿送付)
 - ◀ 6月8日、モスクワで「プーシキン講演」 ▶
 - ◀ 6月9日、シャピロによる肖像写真の撮影 ▶
- ・ 7月号、第四部第十一篇1-5章、(4月-6月執筆、7月6日原稿送付)
- ・ 8月号、第四部第十一篇6-10章、(7月-8月初め執筆、8月10日原稿送付)
 - ◀ 8月12日、「プーシキン講演」を巡る『作家の日記』特別号の発行 ▶
- ・ 9月号、第四部第十二篇1-4章、(8-9月執筆)
- ・ 10月号、第四部第十二篇5-14章、(8-9月執筆)
- ・ 11月号、エピローグ、(10月執筆、11月8日脱稿、原稿送付)

次に『カラマーゾフの兄弟』と「プーシキン講演」とを対応させるために、講演に関係する様々な出来事を整理すると、以下の如くなります。

- ・ プーシキン祭での講演依頼（4月に非公式な招待状。正式な招待状は5月2日）
- ・ 講演に向けての準備（草稿の主要部分の執筆は5月2日-9日）
- ・ ポベドノースツェフへの手紙（5月19日。「草稿では‘究極の信念’を吐露しました」）
- ・ モスクワ行き（5月23日）

- ・講演（6月8日）
- ・パノーフによる肖像写真の撮影（6月9日）
- ・家族の夏の住まいスターラヤ・ルッサへの帰還（6月11日）
- ・講演への賛否両論との向き合い、『作家の日記』特別号の発行（8月12日）

以上からすると、「プーシキン講演」に関わる期間（4-7月）とは、彼が『カラマーゾフの兄弟』第四部第十一篇の1-5章と取り組んでいた期間（4-6月）、更には6-10章と取り組んだ期間（7月-8月初め）とほぼ重なることが分かります。これら二つの仕事は、それぞれが決して無関係にあるのではなく、ドストエフスキイの内で互いに強く関連し合い、その思想展開と強く結びつき、ひいては我々の問題とする肖像写真の読み解きにも大きく関係すると考えるべきでしょう。

以下では「プーシキン講演」を巡る出来事を一方に置いて、『カラマーゾフの兄弟』第四部第十一篇の1-5章が、そして続く6-10章が、この作品全体の構成の中でどのような位置を占めるのか、またどのような意味を持つのか、確認をしてゆきましょう。これら第十一篇前半・後半二つの部分の創作が、肖像写真が持つ二つの相反した相貌と響き合うことが明らかとなるでしょう。

カラマーゾフ論については、私の以下の二つを参照して下さい。
『カラマーゾフの兄弟』の構造、またそのキリスト教思想について、聖書的磁場の分析に基づいて考察したもので、「ドストエフスキイの肖像画・肖像写真」との取り組みにも参考になると思います。

- ・『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 — 』
（河合文化教育研究所、2017）
- ・「ドストエフスキイ研究会便り（8）～（13）」
（河合文化教育研究所HP、2017～2019）

『カラマーゾフの兄弟』の構成 — 第四部第十一篇に至るまで —

まず『カラマーゾフの兄弟』全体（四部十二篇＋エピローグ）の構成に目を向けておきましょう。前回我々はこの作品前半の第一部（一・二・三篇）と第二部（四・五・六篇）の構成と、その持つ意味について考え、そこを貫くのが「神と不死」のテーマであることを確認しました。このテーマの下に、聖者ゾシマ長老の死と家長フョードルの惨殺という二つの死が決定的な駆動力となって、カラマーゾフ家の兄弟四人が、「神と不死」発見に向けたそれぞれの旅ドラマを繰り広げてゆくのです。

注目すべきことは、この大きな枠の中で、一方に末弟アリョーシャが、他方には次兄のイワンと非嫡出子スメルジャコフが対置され、この対立軸に沿ってドラマが進行してゆく

ことです。前者は聖者ゾシマ長老を師とし、修道院で師が守る「キリストの御姿」を見つめつつ、その「キリストの愛」「実行的な愛」を生きる青年。後者二人は、自らを「父悪魔より出でし」(ヨハネ伝八 44)「嘘の子」と呼ぶ家長フョードルの血を受け継ぎ、この悪魔の血をそれぞれの内で「否定の精神」として脈打たせ、「父親殺し」に向かう同年齢の異母兄弟です。この「肯定と否定」「光と闇」の対立軸を太い縦糸として、「神と不死」のテーマの下、福音書の磁場で「罪」と「罰」と「赦し」のドラマが激しく交錯しつつ展開するのが『カラマーゾフの兄弟』だと言えるでしょう。

第三部の第七篇では師ゾシマ長老の死と、その余りにも早く余りにも強烈な腐臭の発生により絶望と迷いに陥ったアリョーシャが、グルーシェニカとの「一本の葱」の授受によって、その絶望と迷いから目覚めさせられ、次いでゾシマ長老とイエス・キリストの復活体との出会いを与えられ(「ガリラヤのカナ」、更には決定的な神体験を与えられるという劇的な場面が次々と描かれます。『カラマーゾフの兄弟』後半冒頭を飾るに相応しい一篇で、ここでイエス・キリストからゾシマ長老を経てアリョーシャに到るまでの「聖なる系譜」が読者に示されるのです(なおこの作品において「一本の葱」は、「実行的な愛」「キリストの愛」とほぼ同じ意味で用いられています)。アリョーシャの一連の回心体験は、文学が達成し得た恐らく最も深淵な宗教体験の描写の一つであり、我々はここでアリョーシャが会おうイエス・キリストが、「大審問官」の叙事詩でイワンが描くそれと共に、ドストエフスキイが生涯最後に正面から提示するイエス・キリスト像であることに注目すべきでしょう。

「プーシキン講演」との関係で注意すべきは、この第七篇が既に講演の十カ月ほど前に発表されていることです(『ロシア報知』1879年、8-9月執筆)。先に我々は「プーシキン講演」を巡り、グラードフスキイへの反論で、「キリスト教的^{プラスヴェシチェーニエ}啓蒙」という言葉から始めて、ドストエフスキイが捉えていた「ロシアのキリスト」と、それへの彼の熱烈な信と愛について確認をしたのですが、この「ロシアのキリスト」とは、彼が前年に描いたアリョーシャの回心の場面、「ガリラヤのカナ」に登場するキリストとそのまま連なるキリストだと言ってよいでしょう。ここに浮かび上がるのは、ドストエフスキイの内に脈々と息づくキリストを中心とした宗教的認識・超越認識の基本構造です。先に我々は、それを「キリスト中心主義」と呼んだのですが、彼はそれを『カラマーゾフの兄弟』創作の場では、「実行的な愛」の人アリョーシャを核とする具体的な人間ドラマの形で、続く「プーシキン講演」においては、先に見たような預言者的メッセージの形で、相次いで提示していったのです。

この第七篇を出発点とし、それ以降の『カラマーゾフの兄弟』とは、修道院を出て「キリストを守るのだ」という師ゾシマの遺訓に従い、新たに在俗の生活を開始したアリョーシャが、他の三兄弟を始めとする様々な人たちの苦悩に寄り添い、彼ら一人一人を「神と不死」発見の旅へと、そして「キリストの愛」「実行的な愛」へと導いてゆくドラマです。第三部の後半第八・九篇にアリョーシャが直接登場することはありません。しかしここでは長兄ドミートリイに光が当てられ、彼が内に宿す「裸形の曠野」が次々と暴き出され、結局はこの青年も「父親殺し」の嫌疑による逮捕・投獄という試練を通し、弟アリョーシ

ヤが守るキリストの前に引き出されてゆくのです。そして第四部第十篇における、少年たち（ユーリヤ・イリュージン）と「実行的な愛」の人アリョーシャとの交流を経て、ドラマはいよいよ我々が課題とする第十一篇へと至ります。

第十一篇 1－5章 — アリョーシャの「実行的な愛」 —

『カラマーゾフの兄弟』第十一篇 1－5章が、「プーシキン講演」に関わる様々な出来事とほぼ並行して執筆されたという事実は、いくら注意してもし過ぎることはないでしょう。この第十一篇 1－5章の全ては、今までの流れをそのまま受けて、「実行的な愛」の人アリョーシャを中心として話が展開します。つまり「父親殺し」の犯人として誤認逮捕されたドミートリイの公判を翌日に控え、アリョーシャがそれぞれの苦悩と不安を抱える人たちを次々と訪問し、その悩みや迷いに耳を傾け続けるのです。他者の愚痴や訴えに静かに耳を傾けるこの青年のことを、弱々しく生彩がないとする読者や評者が少なくありません。しかしそうでしょうか？ ドストエフスキイはアリョーシャを、「ガリラヤのカナ」においてゾシマ長老とイエス・キリストの復活体と出合わせ、更にはその直後に決定的な神体験を与え、「全生涯を通じての揺るぎない戦士」として起ち上がらせているのです。この青年を貫くのは、イエス・キリストに倣って自らも十字架を担い「実行的な愛」に生きよう、人々に「一本の葱」を与えようとの揺るぎない意志であり、作者ドストエフスキイが彼において描くのは、弱々しさや生彩の無さなどとは全く逆の、透徹した認識と信と愛に裏打ちされた、言葉の真の意味での「強さ」だと考えるべきでしょう。

このように第十一篇 1－5章では、『カラマーゾフの兄弟』後半を担うアリョーシャが前面に出て、「キリストの愛」つまりは「実行的な愛」を具体的に生きるドラマであること。そして「プーシキン講演」とそれを巡る様々な出来事もまた、このアリョーシャのドラマと並行して、「ロシアのキリスト」に対する熱烈な信と愛を表明するものであること——これらの事実の前に立つ時、我々はドストエフスキイ最後の肖像写真の背後に、イエス・キリストの濃い影を読み取らないことは許されないでしょう。

そしてこの辺の事情を誰よりも的確に認識していたのが、彼の妻アンナだったのではないのでしょうか。彼女はパノーフが撮影した夫の肖像写真について、三十余年の後に、ここに刻まれているのは「この上ない喜びと幸せ」の表情だと記したのですが、彼女はこの「喜びと幸せ」が、夫がポベドノースツェフへの手紙で記したように彼の「究極の信念」を表明し得た「喜びと幸せ」であること、つまりモスクワの講演において「ロシアのキリスト」を語り得たことへの魂の高揚と陶酔であることを理解していたことは間違いないでしょう。

先に [2] の終わりで記した結論 (p.15「新しい視野」) を受けて、ここで結論の一つを記すとすれば、この肖像写真にはキリストが存在する。そしてここにはキリストに対するドストエフスキイの熱い信と愛がある——改めてこのように表現出来るでしょう。

残された問題

しかし我々にはもう一つの検討すべき問題、出すべき結論が残されています。「はじめに」で記したように「行きつ・戻りつ」となるのですが、ドストエフスキイ最後の肖像写真の前に立つ時、我々の心が「この上ない喜びと幸福」というよりも、まずはこの上なく厳しく鋭利な、真剣で深刻な印象に支配されてしまうという問題です。この肖像写真の相貌が、このような印象を与えるのは何故なのか？——我々は先の〔2〕の最後で (p.15「新しい視野」)、ドストエフスキイの思想の本質として「光と闇」の「極性の弁証法」について論じ、この問いに対する答え・結論も、ロシアの歴史に対するドストエフスキイの痛切な危機感として提示しているのですが、最後に『カラマーゾフの兄弟』第十一篇 1-5 に続いて 6-10 章を検討することから、この結論を改めて確認したいと思います。

第十一篇 6-10 章 — 兄弟間の対立図式、その重層性 —

前回我々はシャピロによる肖像写真の撮影後、ドストエフスキイが取り組んだ「大審問官」の叙事詩 (第五篇 5 章) が、『カラマーゾフの兄弟』前半の大きなクライマックスであることを見ました。ここで悪魔の「否定の精神」に身を委ねたイワンの、神否定に続く「キリストの愛」の否定という「大事業」が提示され、これに対して「キリストの愛」に拠って立つ弟アリョーシャの「実行的な愛」が正面から打ち出されたのでした。「神と不死」を巡る「肯定と否定」「光と闇」。ドストエフスキイ文学最後の激しい原理的対決が、福音書的磁場において、いよいよ兄弟の間で繰り広げられてゆくのです。

この「大審問官」の発表から一年余り。パノーフによる肖像写真の撮影後、「プーシキン講演」を巡る『作家の日記』特別号の編集・発行と並行して、ドストエフスキイが取り組むのは『カラマーゾフの兄弟』第十一篇 6-10 章です。兄弟間の対立は極限化し、最終篇 (第十二篇) の裁判と並んで、作品後半最大のクライマックスとなるでしょう。

注意すべきことは、第十一篇 6-10 章における兄弟間の対立が、先のアリョーシャとイワンとの対立から更に進んで、この作品の「ブラック・ホール」とも言うべき非嫡出子スメルジャコフを加え、複雑さと激しさを劇的に増してゆくことです。つまりドストエフスキイは、悪魔の「否定の精神」に身を委ね「父親殺し」に踏み込んだイワンとスメルジャコフ二人の兄弟を共に、懼るべき罪意識の地獄に投げ込み (ゾシマ長老が予言した「悪業への懲罰」の現前です)、三度にわたる熾烈な「対決」を繰り広げさせ、それぞれの神との出会いから、それぞれの破滅 (と遠い再生へ) の道を歩ませるのです。イワンの「十字架への道」、そしてスメルジャコフの「絞首台への道」です。この第十一篇 6-10 章に描かれる異母兄弟二人の神発見と没落 (更には再生へ) のドラマとは、繰り返しますが、『カラマーゾフの兄弟』後半の正に最大のクライマックスであり、ドストエフスキイ文学のみならず、およそ文学というものが描き得る、また人間の魂が体験し得る最も懼るべき「悲劇的回心劇」と言うべきものでしょう。ここでドストエフスキイは、人間の宗教的認識の深化と覚醒のプロセスが、如何に懼るべき地獄を経ねばならないかという逆説を描くのです。

忘れてならないのは、これら二人の兄に影のように寄り添い続け、兄たちの「悪業への

懲罰」、「罪」と「罰」のドラマを誤魔化しなく見つめ、その没落からの再生を神に祈るアリョーシャの存在です。「イワン対アリョーシャ」から「イワン対スメルジャコフ」へ。そして「イワンとスメルジャコフ対アリョーシャ」へ——兄弟たちの重層的な対立、つまり『カラマーゾフの兄弟』を貫く「肯定と否定」「光と闇」の分裂劇は、「実行的な愛」の人アリョーシャの存在があつて初めて、その最終段階を迎えるでしょう。

「神と不死」の問題を巡って、人間は何処まで悪魔の「否定の精神」に自らの魂を委ね得るのか？ またその帰結が如何なる懼るべき「悪業への懲罰」として人間に臨み得るのか？ そしてそれら罪人の没落を超えて如何なる救済と再生の道はあり得るのか？ 現代においてなお「キリストの愛」は有効であるのか？ —— 第十一篇6-10章でドストエフスキイは兄弟たちの対立劇を極限まで導くことによって、「神と不死」を巡る「肯定と否定」「光と闇」の分裂が究極何処に行き着くのかを見極めようとしているのです。

パノーフが撮影したドストエフスキイが、このような「肯定と否定」「光と闇」の分裂の行き着く先を巡る考察、言い換えれば『カラマーゾフの兄弟』創作に関して、「一切か・無か」を賭けた最後の困難な仕事と取り組みつつあるドストエフスキイであることを知る時、我々がその表情の内にただ「プーシキン講演」の成功に酔い痴れる「喜びと幸福」のみを読み取るとしたら、たとえそれが「ロシアのキリスト」を語り得た「喜びと幸福」であったとしても、なお片面的で能天気な認識だと言わざるを得ないでしょう。彼はそのキリストを忘れて破滅に向かう祖国ロシアを、果たして再びキリストに立ち帰らせ得るか否かという問いの前に、言い換えれば「一切か・無か」の崖っ淵がけぶちに立っているのです。

ドストエフスキイ最後の肖像写真。ここにいるのはキリストへの信と愛の炎を内に燃やすドストエフスキイと、悪魔道に踏み込んでしまった人間を厳しく見つめ弾劾し、彼らの究極の「破滅か・再生か」を探るドストエフスキイである——これが我々の結論です。

おわりに

我々人間の生の現実を構成するのは「光と闇」であり、キリストを前にした人間の現実もまた「光と闇」である。しかしこれら「光と闇」の両者が共に存在しない限り現実はなく、また真実もあり得ない。「光」が強くなればなるほど「闇」は深くなり、「闇」が深くなればなるほど「光」は強まる——ドストエフスキイがその作品を通じて、また最後の肖像写真で我々に読み取ることを迫っているのは、このような「光と闇」の拮抗というニヒリズムではなく、「光と闇」からなる活きた「極性の弁証法」ではないでしょうか。

そしてこの夫ドストエフスキイの傍らで、アンナが『回想』とその生を通じて我々に指し示してくれているのは、以下の真実であるように思われます——必要なのは両者を見つめるリアリズム、しかも究極の「光」を信じて「闇」を生きる強靱な眼と心である。

(了)

アンナの肖像写真

ドストエフスキイの妻アンナ(1846-1918)の肖像写真を、最小限の解説と共に、5枚掲載しておきます。③については、既に我々の「ドストエフスキイの肖像画・肖像写真・7」で紹介してあります。ドストエフスキイばかりでなく、ここにも素晴らしい人間とその魂が存在します。アンナに目を向けることで、ドストエフスキイ世界は更に深みと奥行きと豊かさを増すでしょう。



①.1866年。
ドストエフスキイとの出会いの年。



②.1870年。西欧旅行(1867-1871)、
ドレスデン再滞在の時。



③.1878年。次男アリョーシヤの死の数ヶ月後。



④.1883年。次女リュボーフィ、長男フョードルと。



⑤.1916年。『回想』執筆（1911-16）最後の年。